

平成 22 年度共同利用・共同研究拠点公募プログラム研究
「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同研究成果報告書

研究課題名：ロシア・東欧地域における領域性認識と歴史表象の関係

申請者：小森宏美(京都大学地域研究統合情報センター・准教授)

構成員：石田信一(跡見学園女子大学文学部・教授)

石野裕子(津田塾大学国際関係研究所・研究員)

梶さやか(神戸夙川学院大学・非常勤講師)

吉岡潤(津田塾大学学芸学部・准教授)

[研究の目的]

本共同研究は、ロシア・東欧地域の人びとの領域性認識を映し出すものとして歴史表象を取り上げ、その時代ごとの比較整理を行い、そうした領域性認識と隣国関係・国家統合の連関／非・連関について明らかにすることを目的とするものである。

ロシア・東欧地域は、歴史上繰り返し国境線の変更を経験してきた。本研究が対象とするセルビア、クロアチア、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア、エストニア、フィンランドも例外ではない。こうした国境線の変更は、支配・被支配関係の交代や逆転、あるいはねじれを伴うことが少なからずあり、歴史表象がそうした変更を極めて受けやすいことはいままでのまではない。同時に、歴史表象が領域性認識に与える影響といった認識の循環性も指摘しておくべきであろう。

本研究では対象として上記に挙げた国々の、19 世紀から現代を通じての歴史表象の変遷をそれぞれ整理し、比較するための枠組みを提示する。それぞれ、帝国下での民族運動、独立国家の獲得を経験し、またフィンランドとポーランドを除いては連邦制とその連邦制の崩壊を経験した。そうした中で、歴史の主たる書き手／表し手は交代しても、多民族・多文化が混交するこの地域ではそれを受け取る側の受け取り方は決して一様ではなかったはずである。そうした歴史表象とその受け取られ方を比較考察することで、国境線変更と領域性認識のずれを読み取ることを試みることを通じて、集団間の歴史認識の対立が社会の亀裂や国家間関係の緊張につながるという前提を批判的に再検討する契機とする。

[研究の実施状況]

平成 22 年度内に研究会を 2 回開催し（東京および京都）、それぞれ 2 人が報告した。また、構成員がスラブ研究センターおよび北海道大学附属図書館にて資料収集を行った。

[研究の成果]

1. 領域性認識と歴史認識の間の循環関係を実証するのは困難であるが、それが比較的顕

著に現れる例としてポーランドならびにリトアニアが挙げられる。両国では、とりわけ、一つの国であった中・近世の歴史評価が時代によって大きく揺れを見せる。現時点においては、ヨーロッパの規範を反映した多文化・多民族・多宗教状況に対する極めて肯定的な評価が、現在の歴史表象に投影されている点が確認された。

2. エストニアならびにラトヴィアでは独立回復後、ライフストーリー収集プロジェクトが盛んである。こうしたライフストーリーの一部は刊行もされている。ライフストーリー収集自体は新しい現象ではなく、また個人の記憶に依存した叙述であることから生じる問題をはじめとするライフストーリーを利用する際の多くの問題は指摘されているものの、例えば、そうした記憶の歪みも含めて本研究ではライフストーリーを一つの手段として採用できると考えた。いわゆる公的歴史認識が形成される過程で捨象された認識へ再度光を当てるという手法である。それは、公定の歴史観に異議申し立てをする対抗史観の形成というよりはむしろ、そうした方法は、誤解をおそれずにいえば、際限なく下方へ、または周縁へ広がらざるを得ないが、そうした営為こそが、複数の歴史認識の間の序列化や齟齬を解消する可能性を有していると考える。

3. 本共同研究で領域性認識と歴史表象の関係に関する地域間比較を行って得られた知見としては、「歴史」を過去に関する「知の社会的表象」としてとらえたことが挙げられる。すなわち、すべての歴史が同時代史／現代史であるにとらえるだけでなく、過去を輪郭ある歴史にするその過程と体制全体を「歴史」とする歴史観の提示である。こうした「歴史」の構築過程ならびに体制を分析するひとつの方法として歴史表象研究の可能性が本研究では提示できた。問題は、この場合の「社会」としてどのような範囲が、どのような人びとの間で想定されるかということであり、領域的にまとまった社会だけではなく、ネットワーク型社会のようなあり方についても目配りする必要のあることが指摘できる。

[研究成果の公表]

本共同研究の成果は、地域研究コンソーシアムの雑誌『地域研究』にて平成 23 年度に公開される予定である。